

幼小連携のカリキュラムについての研究 —「体育」「音楽」の領域を中心に—

白川 佳子（初等教育学科・准教授） 東 ゆかり（初等教育学科・准教授）
西島 大祐（初等教育学科・講師） 荒松 礼乃（初等教育学科・講師）
中島 朋紀（初等教育学科・講師）

1. 研究目的

幼小連携の問題が注目されている背景には「小1プロブレム」の問題があげられる。幼稚園や保育所から進級してきた小学1年生が新しい環境に適応できない原因としては、幼稚園と小学校の間に生じた「段差」と「連続」のつまずきがあるとも言われている。現在、幼小連携の取り組みは、保育者や教師間の交流や子ども同士の交流などさまざまなレベルで行われているが、小学1年生が入学間もない1学期当初の時期に学校生活に対してどのような適応状態にあるのか検討した研究は少ない。

そこで、本研究では、幼児期の「体育」「音楽」などの「楽しい学び」が、小学校の教科における「知的好奇心」としての学習に組み換えられるにはどのような方法や課題について検討することを目的とし、小学1年生における「体育」「音楽」の授業における子どもたちの行動を観察することを通して検討したい。

また、幼児期に培った子どもたちの「学びの芽生え」が、「接続期」である小学1年生の活動において、どのように移行しているのかについて、小学1年生の授業担当者との話し合いの機会を持つ。「接続期」における子どものつまずきやとまどいは、子どもが乗り越える力を獲得するための機会であるという捉え方もあるが、一方で、子どもが乗り越えられるようにするため幼児教育のやり方を取り入れるなどの取り組みも必要であろう。そして、打ち合わせを通して、小学1年生の授業担当者が、幼児期までの子どもの「学びの芽生え」についての理解を深めると共に、本研究の共同研究者が、小学1年1学期の子どもの適応過程の実態を知ることにより、「学びの芽生え」を主軸とした幼小の一貫したカリキュラムとはどのようなものであるのかについて検討する。

さらに、幼稚園年中クラスにおける参与観察をすることにより、年長児から小学校1年生までの発達の道筋を理解するための参考としたい。

2. 研究計画

(1) 平成19年度（1年目）

- ①文献や資料等による先行研究の検討
- ②幼小連携の実践校への視察
- ③幼稚園における幼児の遊び観察
- ④幼稚園・小学校教諭へのインタビュー

(2) 平成20年度（2年目）

- ①幼稚園における幼児の遊び観察

- ②小学校における子どもの観察
- ③調査結果の分析・考察と研究報告（鎌倉女子大学紀要）

（3）平成21年度（3年目）

- ①幼稚園・小学校教諭とのカンファレンス
- ②調査結果の分析・考察と学会発表（日本保育学会・スポーツ教育学会）
- ③研究報告書の作成

3. 研究の結果

（1）研究1：幼稚園や小学校への視察と実践

研究1年目には、幼小連携に関する先行研究の検討とともにさまざまな幼小連携の実践校への視察を行った（表1）。本研究の研究メンバーの幼小連携に関する共通理解を図るため、幼児期から小学校低学年までの子どもたちの様子を視察し、子どもの発達の道筋について学ぶことを主体とした。それぞれの視察から得た知見については、定期的に研究会を開催し報告を行った。

その主な結果としては、①鎌倉女子大学幼稚部、⑤第2回ママパパカレッジ（親子体操教室）、⑥鎌倉女子大学学園祭 わいわいうきうきフェスティバル（親子体操教室）における運動遊びの実践や指導を通して子どもの運動発達についての理解が深めることができた、②ぬるみず幼稚園における夏季保育期間中の子どもの自由な活動の観察を通して、3歳児から5歳児までの発達の理解を深めることができた、③米国タフツ大学サマービル・コミュニティスクールと④米国ホワイトプレインズ・ナーサリースクールに関しては、施設見学やプログラムの資料を通して、幼児期から児童期までの子どもたちが地域の中で自然に交流する場が提供されており、幼児が小学校に関する知識を習得する機会となっていた、⑦和光小学校の公開研究授業では、小学校1年生の音楽の授業を観察し、じゃんけん列車やしりとり遊びなど幼児期に遊んでいた音楽遊びを授業に取り入れるなど幼小連携の取り組みが見られた、などであった。これらの結果をもとに、幼稚園と小学校での観察の計画の検討を行った。

表2 幼小連携に関連する視察場所と視察日時の一覧

視察場所および実践した場所・視察日時	視察者
①鎌倉女子大学幼稚部（年長クラス） 訪問日：平成19年4月20日（金）（ダンスや遊びの観察） 平成19年5月11日（金）（サーキット遊びの実践・指導） 平成19年6月29日（金）（リズム運動の実践・指導） 平成19年11月28日（公開保育） 平成20年3月4日（火）（体力測定）	西島大祐 西島大祐 白川佳子 白川佳子
②ぬるみず幼稚園（夏季保育） 訪問日：平成19年8月29日（水）9時～13時	白川佳子
③米国タフツ大学サマービル・コミュニティスクール 訪問日：平成19年8月31日（金）15時半～16時	白川佳子 東ゆかり

④米国ホワイトプレインズ・ナーサリースクール（日曜学校） 訪問日：平成19年9月2日（日）10時～11時	西島大祐 白川佳子 東ゆかり
⑤第2回ママパパカレッジ（親子体操教室） 実施日：平成19年27日10月（土）13時～16時	西島大祐 西島大祐
⑥鎌倉女子大学学園祭 わいわいうきうきフェスティバル（親子体操教室） 実施日：平成19年11月11日（日）9時半～10時、10時15分～45分	西島大祐
⑦和光小学校（公開研究授業） 訪問日：平成19年11月23日（金）9時～10時半	白川佳子

（2）研究2：幼稚園年中クラスでの参与観察

観察場所：鎌倉女子大学幼稚部

1回目：平成20年9月11日（木）9:00-13:00

2回目：平成20年11月20日（木）9:00-13:00

3回目：平成20年12月4日（木）9:00-13:00

カンファレンス：平成20年12月18日（木）11:00-12:30

幼稚園年長児から小学1年生への「接続」について研究していく前段階として、年中クラスにおける参与観察を実施した。参与観察では、1回目に、かけっこリレー、演奏会ごっこ、レストランごっこ、片づけ、環境構成、2回目に、着替えの様子、白玉団子作り、毛糸のオブジェ作り、お母さんごっこ、泥団子作り、3回目に、着替えの様子、クリスマスお楽しみ会の準備、レストランごっこ、リアカー遊び、砂場遊び、バトン遊び、お母さんごっこについての観察者の気づきをまとめて、観察後のカンファレンスにおける資料として用いた。

観察後の年中クラスの担当者とのカンファレンスにおいて、保育における気づきの資料をもとに意見交換する機会を設けた。その結果、年中クラスの子どもが1学期から2学期にかけての発達の様子や年中児から年長児までの発達の流れについて理解を深めることができた。たとえば、着替えに関しては、年中の1学期よりも2学期では素早くできるようになること、お弁当を食べる際には、年中児ではおしゃべりしながら食べるということが上手にできないが、年長児になるとおしゃべりをしながら食べるようになるなどである。このように、幼児期の発達の道筋を理解することによって、小学校1年生の発達の特徴についての理解を深めることに繋げることができたと思われる。カンファレンスの中では、個別の子どもの具体例を用いながら詳細な発達の道筋について検討しているが、個別の具体例については本稿では省略する。

（3）研究3：小学校1年生の授業観察

観察場所：鎌倉女子大学初等部

①「朝の会」の観察 観察クラス：1年1組

- 1 回目：平成20年 5 月13日（火） 8:30-8:50
- 2 回目：平成20年 6 月17日（火） 8:30-8:50
- 3 回目：平成20年 7 月 8 日（火） 8:30-8:50
- ②「体育」の授業観察
 - 1 回目：平成20年 5 月13日（火） 1 校時「おにあそび」
 - 2 回目：平成20年 6 月17日（火） 1 校時「リレーあそび」
 - 3 回目：平成20年 7 月 8 日（火） 1 校時「新体力テスト」
 - 4 回目：平成20年 7 月15日（火） 1・2校時 「みずあそび（着衣泳）」
- ③「音楽」の授業観察 観察クラス：1年3組
 - 1 回目：平成20年 5 月12日（月） 2校時「まねっこあそび」
 - 2 回目：平成20年 6 月17日（火） 4校時「りずむにのってあそぼう」
 - 3 回目：平成20年 7 月15日（火） 4校時「けんばんはあもにか①」

「朝の会」では、係からのお知らせの際に、お知らせではなく質問をした子どもに対して「今は係からのお知らせの時間です。」と「参加の型」を教えていた。そして、質問をする際には、個人的に先生のところに来よう指導していた。小学校では決められた時間内で行動することや全体に投げかけられた話の内容を理解することが求められる。決められた時間の中で、一人ひとりの子どもの質問を受け付け始めると収拾がつかなくなってしまうため、子どもの状況に合わせるよりも「参加の型」を指導することに重点が置かれていると考えられる。他にも、子どもたちは発言をした後、「これで終わります。」と言って、その後、聞き手の子どもたちが拍手をするという発言のルールが出来上がってきている。

「体育」の授業では、運動会の練習で体操の隊形に開く際に、教師は「○○さん（基準の子ども）は動かないで、両手を広げて、体操の隊形に開け。」と子どもたちに分かりやすく説明をしていた。「元の隊形に戻れ」「小さく前へならい」「左向け左」なども、他の子どもを見ながら遅れたりしていたが、「体育」の授業への「参加の型」を習得してきているようであった。また、運動会の行進の練習をする場面では、子どもたちは、隣の子と合わせて歩くのがとても難しいようであった。教師は、手を上げる位置を「肩の高さまで」「前ならいの高さまで」と分かりやすいように説明を工夫していた。

「音楽」の授業では、まねっこあそびの単元において、授業の導入で「うたえバンバン」の斉唱をした後、展開として「まねっこあそび」に移った。授業の目標は、「拍の流れを感じ、簡単なリズムを表現する」ことである。子どもたちは、幼児期に保育の中でよく経験していた「とんとんとんひげじいさん」「とんとんとんアンパンマン」に対して張り切って楽しく歌う姿が見られた。楽しい雰囲気の中、次々手をあげて色々言い始める子どもたちが出てきた時、教師は「はい、意見のある人は手をあげて。」と「参加の型」を指導していた。他の場面でも手を上げる前に発言する場面が見られ、その都度、教師は「手を上げて発表しましょう。」と注意することによって「参加の型」を教えていた。

小学校における観察結果は、白川ら（印刷中）に詳細を報告している。

（4）研究4：幼稚園教諭と小学校教諭とのカンファレンスおよびインタビュー

①和光小学校1年音楽担当の教員へのインタビュー

訪問日：平成19年12月7日（金）16時～17時半

小学校1年生の「音楽」の公開授業をもとに授業担当者へインタビューを行った。授業内容は、子どもたちが「さんぼ」のピアノ演奏に合わせて、歌いながら音楽室に入室してきて、授業開始の挨拶がなくそれぞれの席についたところから音楽の授業がスタートした。具体的な授業内容は、既習曲を歌う、リズムで遊ぶ、うたっておはなしをする（絵本を用いる）、うたあそびをする（じゃんけん列車）、であった。インタビューでは、小学校1年生の音楽の授業での留意点などを尋ねたが、幼児期に慣れ親しんできた絵本やじゃんけん列車などの音楽遊びを授業の中に取り入れて、子どもたちが音楽に楽しめるように配慮されていることがわかった。

②小学校教諭とのカンファレンス

- 1回目：平成20年4月24日（木）11:00-12:00
- 2回目：平成20年5月1日（木）14:45-15:30
- 3回目：平成20年5月13日（火）9:50-10:10
- 4回目：平成20年5月29日（木）14:45-15:30
- 5回目：平成20年7月22日（火）10:00-11:30

小学校入学後まもない1学期における小学1年生の「朝の会」「音楽」「体育」の授業の中で観察された子どもたちのとまどいを小学1年生の授業担当者との話し合いの中で検討をした。そして、小学1年生の授業担当者が入学直後の子どもたちのとまどいをどのように捉えて、どのような対応を行っているのかについて検討した。

学校の生活全般における「つまずき」や「とまどい」についての教師の取り組みは、下校の際には、担任がバス停まで一緒について行ったり、連絡帳で保護者と確認をする。

身の回りの整理整頓に関しては、担任が児童が登校する前に教室に行っておき指示を出す。休憩時間の過ごし方については、授業時間と休憩時間の区別がついていない児童が多いため、一緒に校内めぐりに行き説明をしたり、時計を常に見えるところに置いておき時間を意識させたり、黒板に具体的な指示を書いておくようにしている。また、時計を活用して長い針が〇までにと具体的に指示を出す。友人関係に関しては、なかなか友人関係になじんでいけない子どもに対して、教師と一緒に遊びながら子どもたちの遊びを仲介していく。コミュニケーションに関しては、他の子どもに〇〇されたという苦情を言うてくる子どもに対しては話を聞くなどして気持ちを落ち着かせる。教室などの場所が分からない子どもたちがいることに関しては、生活科の「がっこうたんけん」で教室やグラウンドに行き、学校の大きな地図を作成して教室に掲示する、などの取り組みがなされていることが分かった。

次に、授業中の「つまずき」や「とまどい」についての教師の取り組みについては、自分からトイレに行きたいと言えない子どももいるので、教師からトイレに行きたい者はいないか尋ねる。敬語が使えない子どもに対しては、言い直させたり、授業中に教師が「です・ます」を使うようにして見本を見せる。授業中の挙手については、「はい」は1回であること、手をきちんと上げること、人の意見を最後まで聞いてから手を上げることな

ど最初に子どもたちにルールを伝える。人前で立って発表することが難しい子どもに対しては、朝の会、帰りの会、日直の仕事などを通して人前で話す機会を設ける。学習面に関して教科書のページがわからない子どもに対しては個別指導をするようにする。ノートの使い方がわからない子どもに対しては黒板に使い方が分かるように分かりやすく書く。机の上を片付けない子どもに対しては、整頓ができるまで活動を開始しない。複数の指示を理解できない子どもに対して、スモールステップで明確に指示を出したり、質問を聞く時間をとるようにする、などの取り組みがなされていることが分かった。小学校教諭とのカンファレンスやインタビューの詳細は内容は、白川ら（2009）に掲載している。

③幼稚園教諭と小学校教諭とのカンファレンス

1回目：平成20年8月22日（金）10:00-12:00

2回目：平成21年7月30日（木）10:00-12:00

1回目のカンファレンスでは、小学校1年生の1学期の子どもたちのとまどいの状況の具体例を出し、幼稚園では子どもにどのようにかかわっておられるのかなど不明な点を質問し共通理解を図った。

2回目のカンファレンスでは、小学校1年生の「朝の会」の子ども様子をDVD映像で見ながら、幼児期から小学校1年生にかけての発達の道筋についての理解を深めた。

4. まとめ

近年、問題視されている「小1プロブレム」は、従来はおとなしく先生の指示に従っていた小学校1年生において、落ち着いて先生の指示に従うことのできない子どもが増加し、授業が成り立たないケースが出てきたというものである（平山、2007）。従来はおとなしく先生の指示に従うことができるということが一般的であったものが、なぜ、今日、先生の指示に従うことができないという状況が出てきているのだろうか。この点に関して、無藤（2007）は、子どもの心理発達を踏まえて幼・小・中の区切りがなされてきたが、最近の子どもにとってはその変化が大きすぎるという問題点をあげている。また、解決策として、「子ども同士の交流」、「教師の交流」、「カリキュラムの一貫性」をあげている。本研究では、「カリキュラム」の視点からの検討を試みたが、この点に関して、多くの先行研究において、幼児期の年長児では協働的な活動を大事にすることが小学校低学年において仲間との集団活動への適応につながることや幼児期の「芽生え」を小学校では意識して指導していくことの大切さが述べられていた。本研究では、カリキュラムの中でも、特に「朝の会」「音楽」「体育」の領域を中心に検討したが、小学校入学直後の子どもたちの行動にはとまどいやつまずきが観察されたものの、小学校教諭がそれらのとまどいやつまずきを把握し丁寧な対応がなされていることがわかった。

5. 今後の課題

図1には、本研究の研究枠組みを示している。幼小連携の研究には、a. 子ども同士の交流、b. 教師・保育者の交流、c. 一貫したカリキュラム、などがあるが、本研究では、小学校での授業観察、幼稚園での保育観察、小学校教諭や幼稚園教諭とのを通して、「一

貫したカリキュラム」の視点から幼小連携を検討したが、今後は、幼稚園教育要領「人間関係」の領域と小学校の「道徳」教育の視点から研究を深めていきたいと考える。

引用・参考文献

西島大祐 2009 幼小の接続期における体育活動の研究 ～幼小連携の視点から～ スポーツ教育学会論文集

白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・秋本篤志・新井孝昇・美甘亜耶・伊藤由美・栗原由佳・吉田彩花・上野高裕 2009 幼小連携のカリキュラムについての一考察 ～小学1年生の「体育」「音楽」の授業観察を通して～ 鎌倉女子大学紀要第16号、51-63.

白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃 2009 幼小連携のカリキュラムについての一考察 ～授業観察を通して～ 日本保育学会第62回大会論文集、345.

白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・中島朋紀（印刷中）幼小連携のカリキュラムについての一考察（その2）～小学1年生の「朝の会」「体育」「音楽」の授業を通して～ 鎌倉女子大学紀要第17号

図1 幼小連携についての研究の枠組み

